

りければ、そらごとのやうにぞおはしましける、御まなこなども、いときよらにおはしますばかり、いかなるおりにか、時々は御らんする時もありけり、みすのあみをの、見ゆるなどもおほせられて、一品宮ののぼらせ給へりけるに、弁のめのとの御ともに候が、さしぐしを左にさゝれたりければ、あこよ、などくしはあしくさしたるぞとこそおほせられけれ、

〔雅言集覽四十七〕くしは右にさすべきものを、左にさしたるを、三條院の見とがめ給へるなり、

〔大和物語下〕昔、やまとのくにかづらきのこほりにすむおとこ有けり、略中この女いとわろくな

りにければ、男わづらひて、かぎりなく思ひながらめをまうけてけり、略中かくて月日おほくへて、思ひやるやう、つれなきかほなれど、女の思ふ事いといみじき事なりけるを、かくいかぬをいかに思ふらんとおもひ出て、ありし女のがりいきたりけり、ひさしくいかざりければ、つゝ、ましてたてりけり、さてかいまめば、われにはよくてみえしかど、いとあやしきさまなるきぬをきて、おほぐしを、つらぐしに、さしかけてをり、手づからいひもりをりけり、いといみじと思ひてきにけるまゝ、にいかず成にけり、

〔雅亮装束抄一〕五せち所のこと

物いみのひろさはからひて、かみをばとるなり、たうにちは、さしぐしといふものを、右の物いみのかしらに、よこさまにさすなり、このくし、これにはさゝす、ながさ六七寸ばかり、齒のたけ五分ばかりあるを、みねのかたへよくそらしあげて、なかをさしたるとぞ申す、

〔歴世女裝考二〕横櫛

今、市中にていやしき女櫛を、斜に挿を横櫛と唱て、よしある女中は、假にもせぬ事なり、よこぐしなるは、心ねもそれとまられていやしげなり、むかしもさる例あり、大和物語略註風吹ばの歌の下に、女のがりいきたりけり、業平ひさしくいかざりければ、つゝ、ましくてたてり、さてかいまめ